

1998年度

入舟遺跡・大川遺跡発掘調査概報

余市川改修事業及び大川橋線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

1999. 3

余市町教育委員会

例 言

1. 本書は、平成10年度に実施された余市川改修事業用地内の入舟遺跡及び大川橋線街路事業用地内における大川遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 本書は乾芳宏が執筆編集をした。
3. 発掘調査及び整理体制

(1) 入舟遺跡 (D-19-53)

所在地	北海道余市郡余市町入舟町181.183 番地
調査期間	平成10年5月12日～平成10年10月6日
整理期間	平成10年11月1日～平成11年3月31日
事業主体	北海道土木現業所
発掘主体	余市町教育委員会
調査面積	1,513㎡
調査担当者	乾 芳宏
調査補助員	安西雅希・岡崎次郎・小川康和
発掘作業員	水田るり子、高野真弓、白銀富子、佐藤人美、阿部栄子、 富岡昭子、高野名竜子、斎藤朱美、内田豊子、新谷美香、 北川千登世、仲鉢悦子、合谷幸代、大森朋恵、岡崎すみ子、 野田真紀子、佐藤洋子、森久美子、佐藤糸穂、久末洋子、 古田千穂、千葉貴子、岡西悦子、水谷洋子、久保照代、 東門田ルミ子、滝川博、渡部昭哉、竹内榮佐、阿部正徳、 柏谷忠勝、寺岡重幸、福岡春夫、大田口義剛、横山和志、 工藤忠幸
整理作業	阿部栄子、富岡昭子、内田豊子、北川千登世、白銀富子、 古田千穂 久保照代 渡部昭哉、竹内榮佐、阿部正徳、 工藤忠幸

(2) 大川遺跡 (D-19-6)

所在地	北海道余市郡余市町大川町81番地
調査期間	平成10年8月17日～平成10年10月31日
整理期間	平成10年11月1日～平成11年3月31日
事業主体	北海道土木現業所
発掘主体	余市町教育委員会
調査面積	775㎡
調査担当者	乾 芳宏
調査補助員	安西雅希・岡崎次郎
発掘及び整理作業員	入舟遺跡と同じ

4. 発掘調査及び整理作業には次の方々の指導、助言、協力を得た。

北海道教育委員会 木村尚俊・大沼忠春・稲市幸生・田才雅彦、札幌市教育委員会 加藤邦雄、石狩市教育委員会 石橋孝夫、小樽市教育委員会 石川直章・青木 誠、仁木町教育委員会 嶋井康夫、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、函館市教育委員会 佐藤智雄、常呂町教育委員会 武田 修、黒松内町教育委員会 高橋 興世、名古屋大学 新美倫子、北海道埋蔵文化財センター 佐藤 剛、瀬戸市埋蔵文化財センター 藤沢良祐、国立歴史民俗博物館 西本豊弘、東京大学 丑野 毅、北海学園大学 藤村久和、泊村教育委員会遺跡調査員 田部 淳・小柳太一・小柳リラコ、近藤芳二、青木延広、佐藤利雄、宮 宏明

凡 例

1. 遺構の平面及び本文中で使用した略称は下記のとおりである。

竪穴住居 H (House) 土坑 P (Pit) 貝塚 SM (Shell Mound)
炉跡 FP (Fire Pit) 剥片集中 FC (Flake Chip)
集合墓 X (特に略称ではない)

2. 挿頭の縮尺については基本的に下記のとおりである。

遺構関係 1/20 場合によってはスケールで示した。

遺物関係 土器・陶磁器・鉄鍋 1/4

上記以外の遺物(金属製品・鉄器・骨角器・玉) 2/3

3. 写真図版の縮尺は任意である。

入舟遺跡発掘調査の概要

1. 遺跡の立地と層序

余市川左岸の河口から約40mの位置にあり、標高約5mの砂層上に立地している。古地図においては余市川は蛇行がおおく河川流域は湿地が広がっていたようである。しかしながら、この一帯は近世から戦前にかけてニシン漁が盛んであったことから民家が立ち並び、遺跡の部分もそれらの関係から表土が大きく攪乱されている。また、余市川の氾濫原であることから大正から昭和時代にかけて護岸工事に伴う埋め立ても行われている。

層序は基本的に6層とし、以下のとおりである。

I	表土	耕作土、攪乱が激しい	
II	黒色土	上部は攪乱 遺物包含層	縄文時代～近世・近代
III	砂層	部分的に攪乱 遺物包含層	縄文時代
IV	黄褐色砂層	礫を多量に含む無遺物層	
V	泥炭層	川底の堆積物層	
U	埋め立て土	礫、黄色ロームなどが堆積している。	

2. 調査方法

5m四方のグリッドを設定し、さらに1m四方に区割りして遺物を取り上げることとし、遺構に関連すると思われる遺物について地点を実測した。



第1図 遺跡の位置

3. 遺構と遺物

(1) 遺構

住居跡	3軒(統縄文1、據文1、不明1)
焚き火跡	43ヶ所(統縄文1、不明42)
貝塚	5ヶ所(統縄文1、近世・近代2、近・現代2)
石組炉跡	2ヶ所(近代)
土坑	1ヶ所(近・現代)
集石	1ヶ所(縄文?)
剥片集中	13ヶ所(統縄文?)
礎石跡	1ヶ所(近・現代)
護岸石垣	

(2) 出土遺物

1) 出土点数 210, 931点

縄文時代中期から近・現代の長期間に渡る遺物が出土している。

土器、石器～縄文、統縄文、據文土器

陶器～東北地方の踏窯他(近代)

陶磁器～伊万里、瀬戸焼他(近世・近代)

金属器～小刀、耳飾り、古銭(近世・近代)

骨角器～針、鉾頭、針入(統縄文、近世・近代)

木製品～浮子、櫓他(近・現代)

ガラス製品～玉(近・現代)

2) 主な遺構と遺物の説明(図版参照)

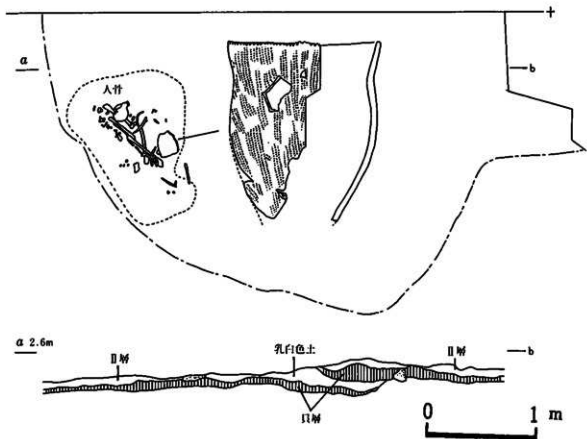
特記すべき遺構として統縄文時代恵山文化期の貝塚(SM-1)がある。約4mほどの範囲のもので厚さ約30cmを測る。東部付近では人骨が出土しており、骨が整った状態であるために改葬している可能性がある(第2図)。また、多くの骨角器も出土している。鉾頭、針、釣針先などであるが動物を模したと思われる用途不明のものもある。石器では鎌、鎌などが出土している。

近世・近代の貝塚は2ヶ所あり、小刀、鉤、鉄鍋、耳飾り、行器の足金具などの金属器、東北踏窯と推定される焼酎徳利、幕末に海外に輸出用の醤油を入れたと言われるコンブラ瓶、伊万里焼の酒徳利、針入、針、エイの尾骨などの骨角器などがある。

近・現代としてニシン籠と思われる石組炉も出土している。



第2図 遺跡の遺構配置図



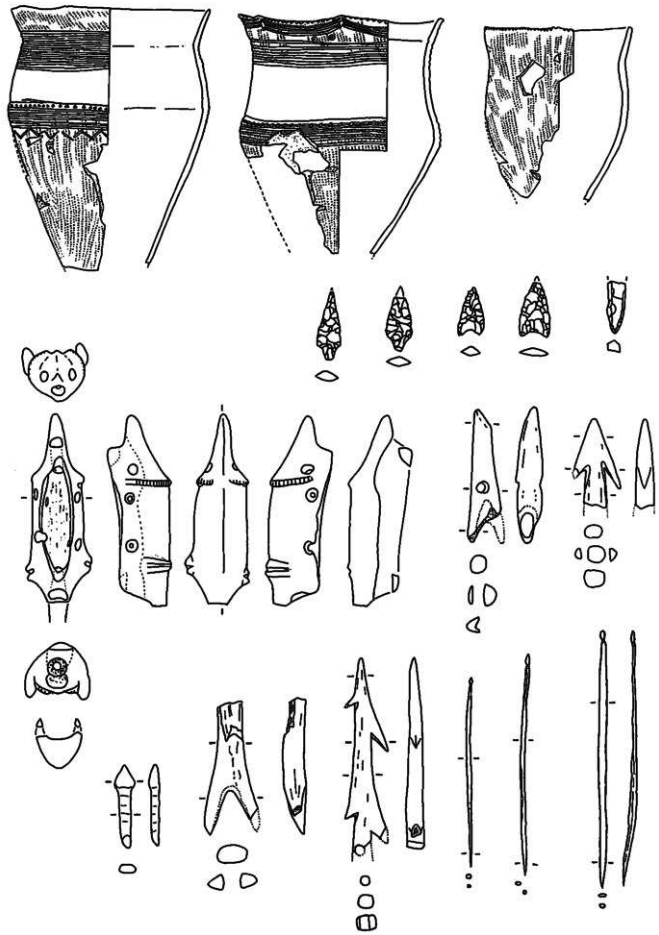
第3図 貝塚の状況 (SM-1～統縄文時代：恵山文化期)

4. 遺跡の性格

縄文時代から近・現代にかけての生活の場であり、余市川の両岸が非常に環境に恵まれていたことが確認できた。

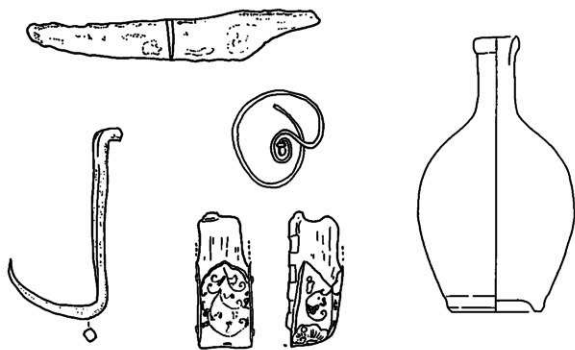
特に貝塚が多く見られることから生業を知る上で極めて重要と考えられる。統縄文時代恵山文化期の貝塚はイガイ、カキを主体としてニシン、カレイなどの自然遺物とともに多くの骨角器が混在しており、日本海沿岸では現在までほとんど発見されず、今回の調査により海洋への依存が強かったことが考えられる。

近世・近代の貝塚ではイガイを主体として多くの陶磁器類が見られ、本州との活発な交易が想像される。その一方でアイヌ民族が使用したと思われる骨角器、耳飾りなどがあり、和人と関係が注意される。

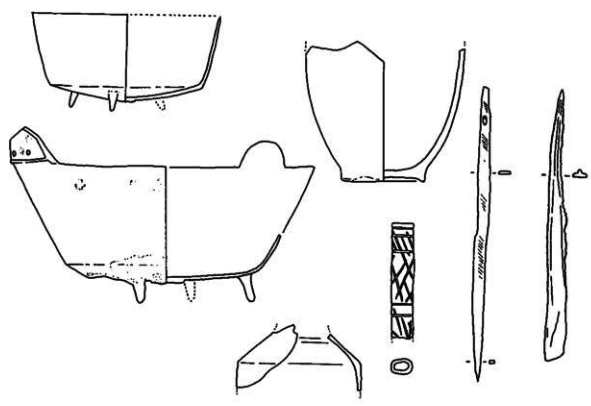


第4図 貝塚出土の遺物 (SM-1~統縄文時代: 恵山文化期)

上段: 恵山式土器 2段目: 石 鏃 . 石 鏃 3・4段目: 骨角器 動物彫骨製品. 短刃. 釣針. 骨

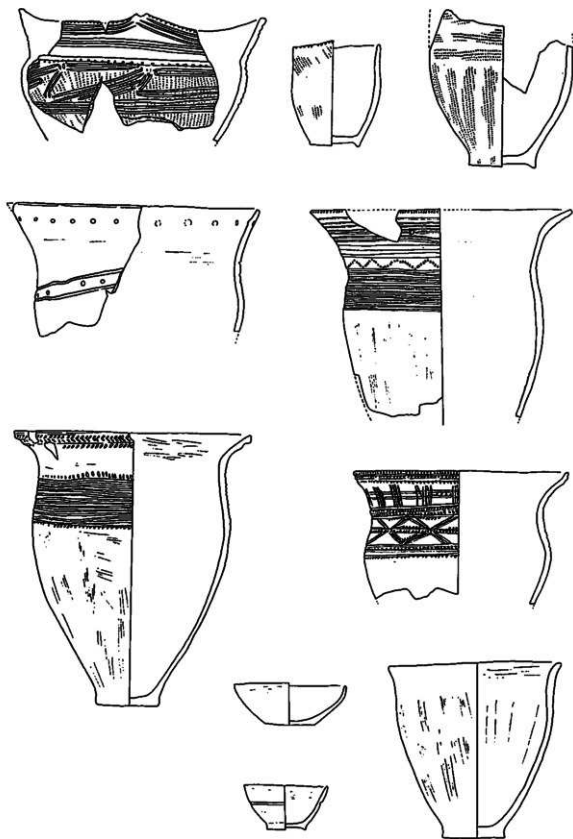


SM-4 (小刀 鉤 耳飾り 行燈の脚部金具 鍍銀漆器)



SM-5 (飯碗 鍍銀漆器 コブラ瓦 骨角器:刺人 針 エイの尾骨)

第5図 貝塚出土の遺物 (近世・近代)



第6図 包含層出土の主な遺物（縄文時代・擦文土器）

上段 鳥山式土器 2段目左 志太式土器 その右 龍文土器

大川遺跡発掘調査の概要

1. 遺跡の立地と層序

余市川右岸の河口から約40mの位置にあり、標高約5mの大川砂丘上に立地している(第1図)。発掘場所はかつて鉄筋の建造物である町公民館があり、現在は商店街の駐車場として利用されている。そのため、表土はもちろん、場所によっては地下2mにも及ぶ擾乱がある。

層序は基本的に3層とし、以下のとおりである。

I	表土	擾乱が激しい
II	黒色土	擾乱によりほとんど擾乱 遺物包含層～近世・近代
III	砂層	遺物包含層～縄文時代晩期

2. 調査方法

道路予定の中心線を基準とし、5m四方のグリッドを設定し、さらに1m四方に区割りして遺物を取り上げることとし、遺構に関連すると思われる遺物について地点を突測した。

3. 遺構と遺物

(1) 遺構	住居跡	3軒(縄文晩期～統縄文?)
	焼き火跡	2ヶ所(縄文)
	貝塚	4ヶ所(近世・近代4)
	土坑	51ヶ所(縄文晩期～墓坑50、土坑1)
	集合墓	2ヶ所(縄文晩期)
	土器集中	1ヶ所(縄文晩期)
	集石	1ヶ所(縄文晩期)

(2) 出土遺物

1) 出土点数 166,049点

縄文時代晩期及び近・現代の長期間に渡る遺物が出土している。

土器、石器～縄文晩期土器

陶器～東北地方の諸窯他(近代)

陶磁器～伊万里、瀬戸焼他(近世・近代)

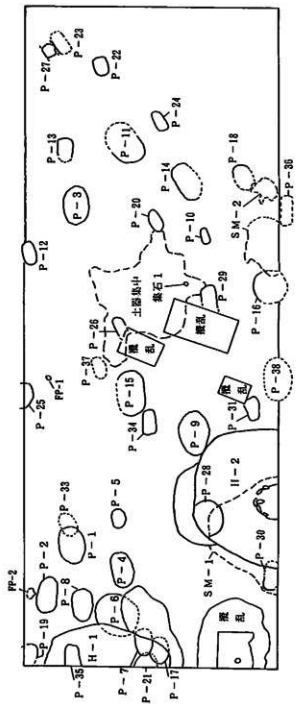
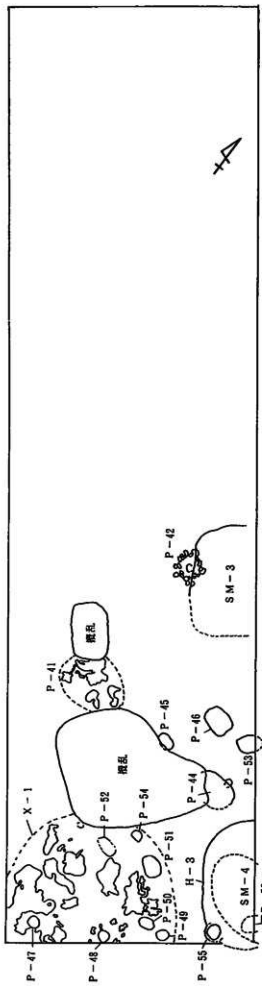
金属器～小刀、舟釘他(近世・近代)

骨角器～中柄、玉他(統縄文、近世・近代)

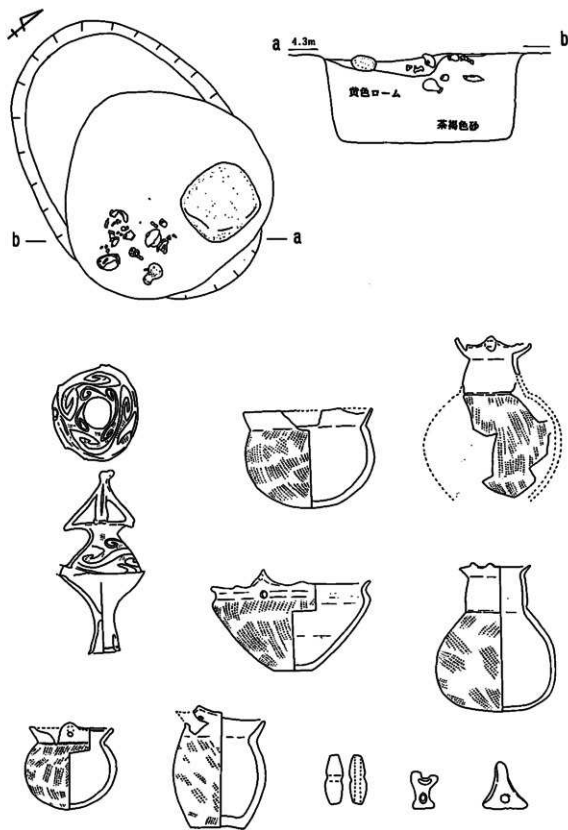
木製品～アバ、桶他(近・現代)

2) 主な遺構と遺物の説明(図版参照)

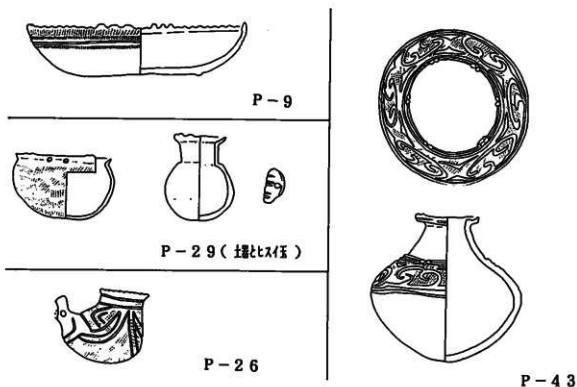
縄文時代晩期の墓坑群であり、副葬品が多く出土している。最も遺



第7図 遺跡の遺構配置図



第8図 墓坑の状況と出土遺物(P-1~縄文時代晩期)
上~下段 土器 下段右3ヶ 土製品



第9図 墓坑出土の主な遺物（縄文時代晩期）

物がまとまっているのは1号墓坑（P-1）である。長軸は約1.5 mほどで墓口には砂の埋め戻しの跡に黄色ロームを封土として遺物を副葬していることである。ここでは異形の土器とともに土製品も出土している（第6図）。

近世・近代の貝塚は4ヶ所あり、小刀、鉤、鉄鍋、東北諸窯と推定される焼酎徳利、幕末に海外に輸出用の醤油を入れたと言われるコンブラ瓶、尖頭器、中柄などの骨角器などがある。

4. 遺跡の性格

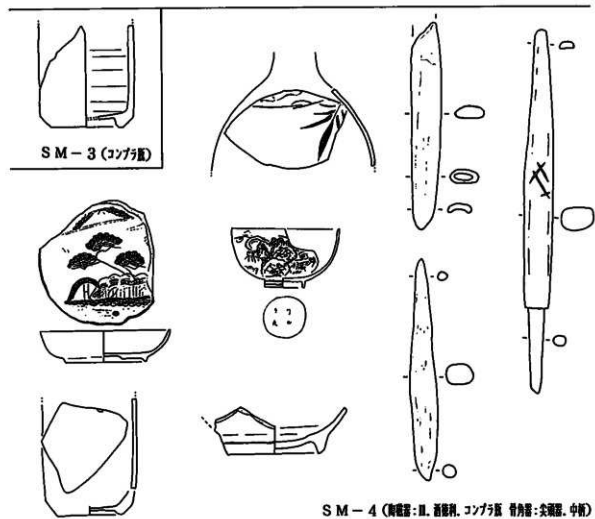
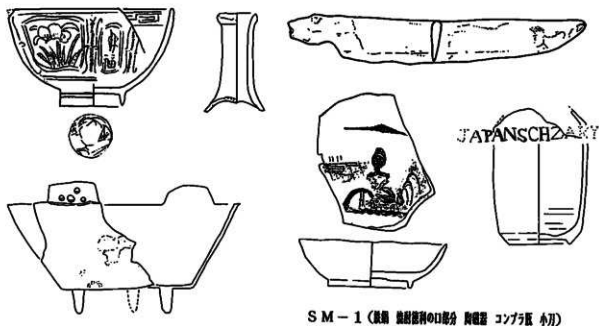
縄文時代晩期の墓坑群、住居跡、近世・近代の貝塚があり、時代の変遷とともに土地の利用が変化していることが看取される。

墓坑群からは、数例の人骨も確認された。副葬品として首飾り、勾玉、土器、石器があり、墓の上部と底部に見られる。基底にはベンガラが敷かれており、発掘の状況から遺体を木製板などで囲んでいた可能性がある。

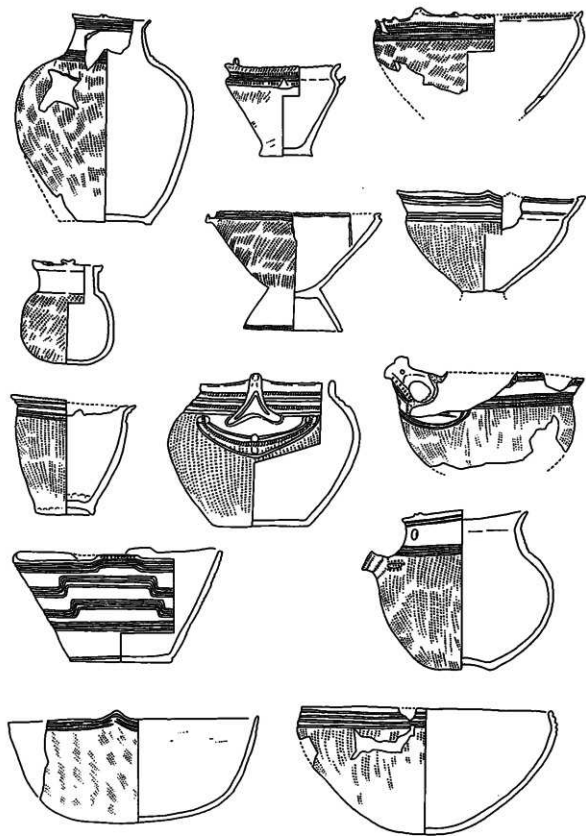
墓坑間には土器破片や半完形土器が密集しており、この地帯一帯が特殊な場所であったことが考えられる。

住居跡は墓坑群が廃絶された跡に掘り込まれているが、いづれも調査区の関係で全形を知ることができなかった。

近世・近代の貝塚は住居跡の窪地を利用したものでイガイを主体として陶磁器類が見られ、海外輸出向けの醤油入れであるコンブラ瓶もみられる。また銚子に使用する中柄も見られ、活発な漁労活動とともに本州との交易を知ることができる。



第10図 貝塚出土の遺物(近世・近代)



第11図 包含層出土の主な土器（縄文時代晩期）



写真1 入舟遺跡全景



写真2 入舟遺跡SM-1



写真3 入舟遺跡SM-4



写真4 入舟遺跡石組炉



写真5 大川遺跡墓坑群



写真6 大川遺跡土器群の出土状況



写真7 大川遺跡P-11



写真8 大川遺跡P-34の首飾り

入舟遺跡 ・ 大川遺跡発掘調査概要

余市川改修事業及び大川橋線街路
事業用地内埋蔵文化財発掘調査概要

発行 平成11年3月25日

編集・発行 余市町教育委員会

〒046-0015

北海道余市町余市町8丁目26番地